

## 『矛盾論』——その復権と哲学的死 (II)

矢 吹 晋

- I 「主要的矛盾方面」の誤訳
- II 「主要的矛盾方面」はなぜ誤訳されたか
- III 「必有一方面是主要的」, 「矛盾起主導作用」の誤訳
- IV 誤訳によって失われたものは何か
- V 『矛盾論』の構造
- VI 『矛盾論』の実践的意義
- VII 『矛盾論』における「上部構造の反作用」論について
- VIII 『矛盾論』(より一般的には「毛沢東思想」)の意義と限界
- IX 根本矛盾・主要矛盾・基本矛盾とは何か  
(以上第11巻第12号)
- X 新島淳良著『毛沢東の哲学』へのコメント
- XI 新島淳良著『毛沢東の思想』第II部へコメント
- XII 『実践論』の論理構造

毛沢東の哲学については、この20年さまざまな議論が行なわれてきたが、それらの論争をふまえて、この数年かなり積極的な発言を続けている論者の一人が新島淳良である。そこで以下においてわれわれは新島の所説を検討していくことにしたい。検討の対象としてとりあげるのは、新島淳良『毛沢東の哲学』(勁草書房, 1966年)および「毛沢東の哲学思想」(『毛沢東の思想』所収, 勁草書房, 1968年)の2書である。この2書について章ごとにコメントを加えていく。したがって以下の第〇章というのは新島の章名である。

なお最後に『実践論』についてのわれわれの理解をかんたんにまとめて、本稿の結びとした。

- X 新島淳良著『毛沢東の哲学』  
へのコメント

「序にかえて」の冒頭で新島は次のように述べている。「毛沢東について、また毛沢東の思想について語る者は多いが、とくに毛沢東の思想について語るばあいに、従来大きな欠点が二つあった。一つは、毛沢東の書いた原文を読まずに翻訳だけで論じ、また原文で読んでも、その使用する諸概念について、十分な検討をしないということである」。その理由の一つとして新島は「日本人の中国にたいする、この百年来の侮蔑感」をあげ、「これは学問上のチャンコロ意識である」としている。「このような思想的風土のなかで毛沢東の哲学は、日本でその本当の姿が伝わらないままに、いびつな姿のまま、ほめあげられたり、けなされたりした。本書は、そのような、従来の毛沢東論の欠点をうずめる一つの初歩的作業を志したものである」。

たしかに、新島のいうとおりである、とわれわれも考える。そこで以下、新島が原文をどう読んだのか、諸概念の検討をどう行なったのかを具体的にみていくことにしよう。

### 第1章 「概念」というコトバについて

新島はここで毛沢東が『実践論』のなかで使っている「概念(gàiniàn)」というコトバの意味を考察している。その結論は次のとおり。

毛沢東の「概念(gàiniàn)」は形式理論学的な「概念(ガイネン)」つまり「抽象的・普遍的な観念」あるいは「特殊を離れた一般性」ではなく、「具体的な内容をもった、普遍的な観念」すなわち「特

殊と結びついた一般性である」という理解である(20~21ページ)。

「概念(gàiniàn)」の解釈に関するかぎり、われわれも新島説を支持できる。だが、問題ははたして「概念」だけなのであろうか。

たとえば「事物(shìwù)」「思想(sīxiǎng)」「運動(yùndòng)」など毛沢東の使うほとんどすべてのコトバが「事物(ジブツ)」「思想(シソウ)」「運動(ウンドウ)」という日本語とは違って「具体的な内容をもった、普遍的な観念」であるのではないか。21ページにわたるこの章で新島はわずかに「概念」だけを扱っているにすぎないが、もし「毛沢東の原文」を問題にするのであればきわめて不十分である、といわなければならない。「概念(gàiniàn)」だけが問題なのではないし、中国語の「概念」は「形式論理的な概念(ガイネン)」の意で使う場合もありうるのだから。

## 第2章 「実践」と「実験」

新島はここで上山春平の次の図式を批判する。新島の引用した上山の図式は次のとおり(41~42ページ)。

ヘーゲル 「生命」→「理論的理念」→「実践的理念」

レーニン 「生き生きした直感」→「抽象的思考」→「実践」

毛沢東 「感性的認識」→「理性的認識」→「実践」

プログラマティズムの認識過程 「知覚」→「思想」→「行動」(傍点部はプラのミスプリ——矢吹)  
バースの論理学 Abduction→Reduction→Induction (傍点部のRはDのミスプリ——矢吹)

新島は上山を批判している。「毛沢東哲学において、認識論を図式化すれば『感性的認識→理性

的認識→実践』になるのではなく、『実践→認識→実践』である」「このばあいの『認識』はもちろん、感性的認識と理性的認識の両方をふくんでいる」(53ページ)。

ここで問題なのは「実践→認識→実践」の系列と「感性的認識→理性的認識」の系列との相互関係であるが、新島がこの関係を論理的に説いているとはいえ、したがってその上山批判も説得力を欠く。

新島曰く「毛沢東の弁証法の第1段階が……人間の社会的実践という、具体的で普遍的な形態(「感性的認識」というのは、それを心理の次元に翻訳した名にすぎない)である」(53ページ)。

感性的認識が社会的実践を「心理の次元に翻訳した名」だというのはいかにマズイ説明であるが、それは問わないにしても、感性的認識がもし新島のいうようなものであるとしたら、理性的認識もまた実践を「心理の次元に翻訳した名」にすぎないのであって、問題は少しも解決しない。この点に関するわれわれの理解は次のとおりである。

認識を実践との関係でとらえれば、実践→認識→実践となり、これが認識過程・認識運動のいわば基本規定である。実践をP、認識をKで表現すれば、 $P \rightarrow K \rightarrow P'$ である。次にある事物についての認識の深化をとらえようとすれば次のごとくなる。

$$P_1 \rightarrow K_1 \rightarrow P_1'$$

$$P_2 \rightarrow K_2 \rightarrow P_2'$$

$$P_3 \rightarrow K_3 \rightarrow P_3'$$

ここで認識の深化とは  $K_1 \rightarrow K_2 \rightarrow K_3$  のことである。 $K_1 \rightarrow K_3$  の過程は、事物の現象的・一面的・外面的の把握から、事物の本質的・全面的・内面的の把握への過程である。したがって  $K_1 \cdot K_3$  をそれぞれさしあたり感性的段階・理性的段階とよぶこ

とができるが、感性的・理性的はいずれも相対的な関係にすぎない（つまり、現象と本質、一面的と全面的、外部と内部、という関係は相対的な関係にすぎない）のである。したがって  $K_1$  が感性的段階であるとすれば  $K_2$  は理性的段階になり、 $K_2$  が感性的段階であるとすれば  $K_3$  は理性的段階ということになる。

さて新島の議論に返ろう。新島は毛沢東の認識論とプラグマティズムのそれとを比較するために次のような対応関係を想定する（45, 53ページ）。

毛沢東 プラグマティズム	実践→理論→実践
	仮説→行動→仮説

実践・行動を P, 理論・仮説を T で表現すれば前者は  $P \rightarrow T \rightarrow P'$ , 後者は  $T \rightarrow P \rightarrow T'$  となる。新島はここで前者と後者の差は「サイクルのちがひ」だというのが、 $P \rightarrow T \rightarrow P' \rightarrow T'$  であるから、けっきょくニワトリが先かタマゴが先かの議論と同じことになり、このサイクル論は無意味である。

新島はまた「行動」と「実践」とのちがひについて、「個々の命題の検証なら『行動』によって完結するが、毛沢東のいう人間の認識は完結することがない」（42ページ）というが、後者が完結しないとすれば前者もまた完結しないものとみななければならない。『『実践』は『理論』より豊かだ』として、『『理論』では明らかでなかったことが、『実践』で明らかになる』（42ページ）ともいうが、「実践で明らかになる」ものは直ちに理論化するはずであり、この意味では（このレベルでは）実践の優位を論証しえない。

新島はまたプラグマティズムの場合は「個々の人間の認識」、毛沢東の場合は「人間一般の認識」（41ページ）を対象にする、と区別しているが、プラグマティズムもまた「人間一般の認識」を問題にしているといっているし、また毛沢東の場合も

「個々の人間の認識」を問題にしている。早い話が「個々の人間の認識」をぬきにしてどうして「思想改造・人間改造」がありうるのか。

以上のようなわけで、新島の比較論はすべて根拠を失う。こういったからとて、われわれは毛沢東の認識論がプラグマティズムのそれと同じだと主張しているのではない。新島のあげたいいくつかの点では両者を区別しえないから、本質的な相異点は別のところに求めるほかないというにすぎない。つまり、認識対象と認識主体、歴史法則と人間の主体性、理論と実践との関係を把握する場合の枠組み自体の違いこそ本質的な差であると考えられるが、この問題についてここで立ち入った検討を加える用意はない。

最後にもう一つ。新島は毛沢東が社会的実践として、生産闘争・階級闘争・科学実験の三つをあげたことについて次の2点から積極的に評価しているが、これも納得的ではない。すなわち、

(1) 科学の認識方法を「弁証法的唯物論のなかに正しく位置づけた」（48ページ）というが、いかなる意味で「正しく位置づけた」のかが説かれていない。生産・階級闘争  $P \rightarrow T \rightarrow P'$  (Pは実践, Tは理論), 科学実験  $T \rightarrow P \rightarrow T'$  なるサイクル論がその位置づけのつもりかもしれないが、新島自身自覚しているごとく、毛沢東は「生産と階級闘争の理論以外に科学なるものをみとめていない」のであって、「科学実験」を「なにか実体的に考え、自然改造・社会改造にふくまれないべつの客体と考えることはできない」（46, 48ページ）のである。

(2) 「科学者の活動を人間の社会的実践のなかに正しく位置づけた」（48ページ）というが、毛沢東のいう科学実験の担い手ははたして「科学者」だけなのであろうか。人民大衆こそ科学実験の真

の担い手なのではないか、と問うことが十分な新島批判となるように思われる。

### 第3章 武谷「三段階論」と毛沢東の認識論

新島はここで武谷「三段階論」<sup>(注1)</sup>と毛沢東「二段階論」との比較を行なっている。

周知のように、武谷「三段階論」とは「自然認識」が次の三つの段階を経て発展するとする説である。

第1の段階＝現象論的段階、現象の知識を集める段階、ヘーゲルのいう個別的判断、an sichの段階。

第2の段階＝実体論的段階、現象が起こるべき実体的な構造を知り、この構造の知識によって現象の記述が整理されて法則性を得ること、ヘーゲルのいう特殊的判断、für sichの段階。

第3の段階＝本質論的段階、諸実体の相互作用の法則の認識、この相互作用のもとにおける実体の必然的運動から現象の法則が媒介し説明し出される、ヘーゲルのいう普遍的判断、an und für sichの段階。

新島はこの武谷説(加藤正説というべきか)に対して、「ヘーゲル弁証法の悪しき影響」「ヘーゲル臭濃厚な三段階論」「神秘的な予定調和の信念」(70, 73ページ)などと批評しているが、新島の批評はかれが武谷説をいかに誤解しているかを示すだけである。

たとえば新島には「自然の階層の多層性」の「段階」(つまり認識対象の段階)とその対象への認識の発展「段階」との区別さえつかぬらしく(69ページ)、また故坂田昌一のいう対象としての自然の「段階」の例示(素粒子——原子核——原子——分子etc.)を直ちに実体的にとらえ、毛沢東のいう「運動形態のこと」だと「解釈」(?)してしまう(68, 69

ページ)。こういう議論のしかたを中国のことわざでは「愚にあらざれば誣なり」という。けっきょく新島の結論は次のようなことになる。「以上くだくだしく書いたが、要は、理論物理学における対象の運動は可逆的であるのに、理論物理学的認識の運動のほうに非可逆的だというにすぎない」(69ページ)。

ここで「非可逆的」というのは「いったんニュートンの段階に達した古典力学の認識はもとへもどってギリシア以前の現象論的認識にもどることはない」(67ページ)という意らしいが、この種の理解が新島式「認識の発展」なるものである。新島は武谷の次の文章をいっただう読んだのであろうか。「この様に物理学的認識わ『ますますどうなる』とゆう様に一律に進むのでわなく、この三つの段階の環をくりかえして進むのである。即ち一つの環の本質論わ次の環から見れば一つの現象論として次の環が進むとゆう工合である」<sup>(注2)</sup>(下線は矢吹、かな使い原文のまま)。

「対象の運動は可逆的、認識の運動は非可逆的」だというのはあとでふれるように新島のドグマに過ぎないが、この種のドグマと明白に対立するレーニンのことばを引用しつつドグマをふり回すから救われない。

武谷派の古田光が毛沢東の認識論について「感性的認識の段階から理性的認識の段階への発展が……無限にくりかえされながら……循環往復する、として捉えられている」<sup>(注3)</sup>と書いたことについて新島はいう。

「循環往復するのは人間の認識ではない。『実践・認識・再実践・再認識』という、日常的な人間活動である。認識はただ『深化』するのである。……循環往復と深化とは対立する概念である。……可逆的な素粒子の世界からの類推で、非可逆的

な人の脳の世界の運動法則を考えるのがそもそもまちがいのだ」(76ページ)。

新島の言とはちがって、「循環往復」と「深化」とは決して対立しない。実践をP, 認識をKとすれば、実践——認識の関係は

$P_1 \rightarrow K_1 \rightarrow P_2 \rightarrow K_2 \rightarrow P_3 \rightarrow K_3 \dots$ と表現できることから明らかのように、PとKとの関係つまり実践・認識という普遍性において把握したとき「循環往復」なのであり、具体的・実体的にみれば、 $P_1 \rightarrow P_2 \rightarrow P_3 \dots K_1 \rightarrow K_2 \rightarrow K_3 \dots$ と実践・認識ともに「深化」しているのである。

この場合  $K_1 K_2 K_3 \dots$  という認識の深化を二段階に分けた概念が認識の感性的段階・理性的段階なのであり、武谷式に表現すれば「一つの環の理性的認識は次の環から見れば一つの感性的認識として次の環が進む」のである。

次に「可逆的・非可逆的」の問題であるが、もし素粒子の世界を可逆的というのなら、脳の世界もまた可逆的である。なぜなら、認識の深化とは感性的認識——理性的認識のくり返しなのだから。逆に、脳の世界を認識の「深化」という視点でとらえて非可逆的というのなら、素粒子の世界もまた非可逆的だといわねばならぬだろう。なぜなら、自然もまたたえず変化しつつあるとみるのが唯物論的解釈なのだから。以上要するに、新島は唯物論と観念論、認識のレベルを混同しているにすぎない。くり返していえば、「認識の対象は、循環往復することがあっても、人間の認識は深化するだけである」(77ページ)という新島の主張は、かれが『実践論』をいかに誤解しているかを端的に示す以外のなにものでもない。

さて以上のようにみえてくると、武谷「三段階論」と毛沢東『実践論』との対応関係は 梅本克己<sup>(註4)</sup> 古田光<sup>(註5)</sup>のいうごとく

現象論的段階——感性的認識の段階

実体論的段階 } ——理性的認識の段階  
本質論的段階 }

と解すべきではなく次のごとくであることは明らかであろう。すなわち、

現象論——感性的、実体論——理性的

実体論——感性的、本質論——理性的

となるのだ。つまり、実体論は現象論との関係においては理性的認識であり、本質論との関係では感性的認識なのである。

武谷式「三段階」が毛沢東式「二段階」に分解できることは以上のとおりであるが、このことから二つの認識論の共通性だけを主張するとしたら、片手落ちの非難を免れまい。両者はやはりかなり異質なのである。よくあげられる例だが、幾何学を発達させたギリシア・ヨーロッパの思考と代数学を発達させた中国の思考はあざやかな対照を示しているし、また孤立語とよばれる中国語はヨーロッパの言語とは著しく異なる構造をもっておりその言語が思考様式に与えた規定性は軽視しえない。このごろはやりの「漢方の認識」と西洋医学の差を例としてあげることもできる。だがここでは立ち入った検討を加える用意はない。

#### 第4章 「矛盾」と「差異」

新島はここで「矛盾」と「差異(chāyì)」について22ページにわたる議論を行なっているが、ながながしい議論にもかかわらず、その主張は必ずしも納得的ではない。つまり新島は寺沢恒信の“ラッパ・トウフ論”、森信成の“矛盾=差異性の別名”論を批判しているのだが有効な批判になりえていない。

寺沢や森の議論はもともと通常の理性の所有者の文章とはいいがたいものである。つまり毛沢東

はソ連の富農と一般農民の間には「差異(chāyì) (チガイと訳せ)があるだけで矛盾はない、フランス革命前の第3階級の間にはチガイがあるだけで矛盾はないとするデボーリン学派を批判して「その差異(チガイ)こそ矛盾である」と書いたにすぎない。フランス革命前において労働者階級とブルジョア階級との対立はまだ激化せず、敵対的になってはいなかったけれども、両者の間にはたんにチガイがあるのではなくて矛盾があるのだ、というのが毛沢東の考え方である。この単純明快な主張がわが「哲学者」諸氏には理解できないらしく、毛沢東のいう矛盾とは「差異性の別名にはかならない」<sup>(註6)</sup>、「トウフ屋をよびとめたら、トウフは売り切れてラップだけがのこっていた、という時には、やはり一つの矛盾である」<sup>(註7)</sup>といった類のコッケイな「解釈」(?)を堂々と展開しているのだ。森や寺沢の「解釈」は当然批判されねばならない。わが新島の批判をみていくことにしよう。

寺沢曰く「同じ畑に 麦と雑草とが生えているとき……たがいに対立し、排除しあう関係、すなわち矛盾がかならず見出される」(新島の引用、88ページによる)。

新島の批判。「とくに同じ畑の麦と雑草の対立などは、労働者・資本家・農民という概念の次元とはまったく異質の、それこそ観念的な矛盾である。なぜか。それは麦と雑草とは『互いに他を自己の存在の前提とする』ということがないからである。いいかえれば、この対立は互いに『それ自身の他者』ではなく、互いに偶然的によせあつめられたものだからである。毛沢東は、このような場合を『同一性がない』と表現している」(88~89ページ)。

新島に問う。「同じ畑の麦と雑草の対立」はは

たして「観念的な矛盾である」のか？ 否である。

「同じ畑の麦と雑草」を一つの事物とみることは可能である。ここでは麦と雑草とは「互いに他を自己の存在の前提」としており、互いに「それ自身の他者」である。麦の優位・雑草の劣位は麦の劣位・雑草の優位と相互転化するのであり、「同一性がある」といっていいのである。このように考えるのが哲学というものであり、『矛盾論』の「活学活用」なのである。「同じ畑の麦と雑草」を矛盾としてとらえることなしにどこに毛思想の「活学活用」があるというのか。新島曰く「雑草がなくても麦は麦であり、麦がなくても雑草は雑草である。さらに、いかなる条件のもとでも麦は雑草に、雑草は麦に転化しないこと、あたかも卵と石、戦争と石のごとくである」(89ページ)。

「同じ畑の」という基本的な条件を忘れ、「雑草がなくても麦は麦」ということこそ「それこそ観念的」であろう。また、「麦は雑草に転化しない」などと書いているが、もしそんなものが相互転化なら、「労働者は資本家に転化しない」のである。いうまでもなく「麦は優位から劣位へ」「被支配階級としての労働者が支配階級へ」変化するのを相互転化とよぶのである。以上のごとく新島の寺沢批判は、新島の限界を逆証明している。

新島は次にヘーゲルを引用しつつ森信成を批判する。わたくしはヘーゲル哲学には不案内だがヘーゲルがわからなければ『矛盾論』が読めないというわけでもないだろうからペダンチズムにひるむことなく前進しよう(もしヘーゲルがわかなければというのなら、大部分の中国人は『矛盾論』を読めないことになるし、毛沢東がそんな難解ないわゆる哲学書を書くはずはないのだ。あえていえば、日本の「哲学者」たちはなまじつかヘーゲルなどにひきつけて毛沢東を読もうとするから読めなくなるのだ)。

新島曰く「毛沢東が、『人間の概念の各々の区別〔差異〕は、客観の矛盾の反映とみるべきだ』といったとき、あきらかに、矛盾がより根本的で、区別は、その反映にすぎない、というマルクス主義の思想を示している」(98ページ)。「概念の区別をとおして、区別の背後に、客観の矛盾をみなければいけない、と毛沢東は言っているのだ」(99ページ)。新島の解説を通じて毛沢東の言っていることはわかりやすくなったであろうか。

「矛盾がより根本的で、区別は、その反映にすぎない」というのは「マルクス主義の思想」であろうか。毛沢東がいったのは、概念の一つ一つのちがいは客観の矛盾(=事物)のちがいであり、このちがいを矛盾である、ということだ。「区別が矛盾の反映」なのではなく、「概念のちがいが客観の反映」なのだ。したがって「概念の区別をとおして、区別の背後に」ではなく、「概念の区別そのものが矛盾だ」と言っているのである。

新島また曰く「区別こそは矛盾である」(差異就是矛盾)という1句はマルクスからレーニン、とくにスターリンを経た唯物弁証法の当然の帰結だったといってよい。しかし、区別(「差異」)のなかに矛盾をみよ、ということとは、区別イコール矛盾ということではない。中国語の『是』『就是』(これは「是」の強調である)はイコールの意味ではない」(104ページ)。「区別」と「矛盾」との関係は、新島の論理の中ではけっきょくどういうことになっているのであろうか。

## 第5章 矛盾の普遍性について

新島は毛沢東が「矛盾だとしている事項」をまず「列挙」し、次に「分類」する。

第1の型は、「スターリンにおいて、あるいはそれ以前においてすでにひろく、唯物弁証法的な

『矛盾』として市民権を得ていたもの」(126ページ)。たとえば、帝国主義と植民地、中国共産党と中国国民党、独占資本主義と自由ブルジョアジー、ファシズムとブルジョア民主主義など。

第2の型は、新島がかりに「理論と実践型」と名づけるもの(127ページ)。「～から～へ」という時間的に前後関係をとってあらわれる対立。たとえば、攻撃から防禦へ、困難な状況を有利な状況に変える、無知から知へ、理論から実践へ、平和から戦争へ、など。

さて、この類型についていう。「第1の型が空間的に共存している矛盾だとすれば、第2の型は空間的には共存していない矛盾である。第2の型は実質的に相互に転化するが、第1の型ではその位置が入れかわるだけである」(127ページ)。「矛盾の分類学」の試みにもなんらかの意味があるかもしれないが、新島式分類にはいったいどんな意味があるというのか。

まず第1の型について「空間的に共存している矛盾」だというのが、はたしてそうか。早い話が、時間をぬきにして矛盾の同一性・闘争性は説けないのであり、このような表現自体が新島の理解する矛盾の一面性を示している。同じ理由で第2の型を「空間的には共存していない矛盾」と規定することもできない。新島も認めるように「第2の型のなかに、第1の型の矛盾をみいだすことはできる」からである。つまり、「戦争と平和」の矛盾だけが「戦争勢力と平和勢力」の矛盾とおきかえられるのではなく、第2の型のすべてが新島の言とはちがっておきかえ可能であり、しかも必要なのである。新島がおきかえに意味がないとする「理論と実践」の問題について具体的に考えてみよう。この場合、第1図のように図示しうる。

第 1 図

T 理論の立遅れ  $\xrightarrow{\quad}$  P 実践の立遅れ

理論活動  $\rightleftharpoons$  実践活動    実践活動  $\rightleftharpoons$  理論活動  
 t                    t'                    p                    p'

上図において t を実践の対象として努力すれば、 $t \rightleftharpoons t'$ 、 $T \rightleftharpoons P$ 、 $p \rightleftharpoons p'$  がそれぞれ相互転化し第 2 図のようになる。

第 2 図

P 実践の立遅れ  $\xrightarrow{\quad}$  T 理論の立遅れ

実践活動  $\rightleftharpoons$  理論活動    理論活動  $\rightleftharpoons$  実践活動  
 p                    p'                    t                    t'

図から明らかなように、かつての「理論の立遅れ」という状況はいまや逆転して「実践の立遅れ」という状況に相互転化したわけである。毛沢東が「理論と実践」が矛盾だというとき、以上の内容を含意しているのだ。このような操作を行なうことなくして相互転化の内的論理を新島はいつたいどう説くのであろうか。

およそそのようなわけで第 1 の型と第 2 の型とを区別する試みは意味を失う。新島は次に第 1 型と第 2 型は矛盾の解決のしかたがちがうというリクツを考え出す。曰く「第 1 の型においては、対立する両側面の消滅が真の解決を意味する」「しかし、第 2 の型においてはそうでない。理論と実践はともに消滅することはありえないし、また消滅させてはならない」(129ページ)。これはまたなんという議論であることか。理論と実践、土台と上部構造、存在と思惟などはいずれも超歴史的な概念だからたしかに「消滅しない」。そして封建制度と農奴、帝国主義と植民地などはもともと歴史的に発生したものでありいずれはかならず「消滅する」。これは全くあたりまえの話であり、新島は

何事をもいっていないに等しい。帝国主義と植民地はたしかに消滅するが、かつて帝国主義の植民地であった国が消滅するわけではなく、また土台と上部構造は消滅しないが、一定の歴史的土台とその上部構造は必ず消滅するのである。

最後に一つ。新島がもし「矛盾の普遍性」を考えたいのなら、毛沢東のいう「事物(shiwù)」とは何か、「事物」をいかにとらえるべきかをまず考えるべきであった。

第 6 章 「主要矛盾」は果して一つか、これについてはすでにコメントを加えた(IXをみよ)。

第 7 章 同一性と闘争性の関係

ここでもまた新島は混乱を重ねている。「つぎに、毛沢東は、第 2 の意味の『同一性』、すなわち相互依存・相互転化の条件性・一時性・相対性ということについて述べている」と書いて(172ページ)早くも馬脚をあらわす。

毛沢東はたしかに同一性を二つの意味で使っている。第 1 は一定の条件のもとでの「相互依存＝統一」であり、第 2 は、別の条件のもとでの「相互転化」である。前者を特に「不同一性」とも呼んだが、これは「同一性」の特殊な形態である。あたかも「闘争性」の特殊な形態である「敵対性」のごとき。

新島は毛沢東の説明が「わかりにくい」というが、毛沢東の論理に忠実でありさえすれば決して「わかりにくい」ものではない。曰く「この説明がなぜわかりにくいか、というと、ここで毛沢東が使っている『統一』という概念が、さきに定義した『同一性』という概念より範囲がせまいからである」(173ページ)。この「統一」は、相互依存

と同義だから同一性の第1の意味であり、第2の意味を含まない以上、範囲がせまいのは全くあたりまえである。「しかし、ここでの『統一』は量的変化の段階だけを指して、少くとも相互転換をふくんでいない」(173ページ)。新島は「少なくとも」で逃げているが、毛沢東は明確に次のように述べている。

同 性 { 第1の状態＝量的変化＝相互依存＝統一  
第2の状態＝質的变化＝相互転化

新島は「ここでの『統一』は日常用語での『統一』で、哲学用語の『同一』『統一』ではない」(174ページ)など書いているが、毛沢東のことばはそのほとんどすべてが日常用語なのであり、哲学用語の場合は特に断わっている。

「まだよくわからない」と新島は続ける。そして毛沢東のいう矛盾の同一性とは、「現実的・具体的な矛盾」のことだ、と考えなおす(174ページ)。しかし、これもヘンナ話である。なぜなら、毛沢東の『矛盾論』は一貫して「現実的・具体的な矛盾」を対象としているのであって、毛沢東がここで特に「現実的・具体的」と断わったのは、「神話や童話」の例をひいた結果その「幻想の同一性」と区別する必要があったからなのだ。

以下2ページ余りにわたって混乱した思考を展開し、ようやく先の整理に到達する。この間約10ページを要している。さらに2ページを要して「もうこの一節について解説は不要であろう」と書く(179ページ)。たしかに。実はこんなに混乱した「解説」など初めから不要だったのではないか。要するに、矛盾の同一性＝統一性というときの「統一」と、相互依存＝統一とを新島が混同しただけのこと。

さて新島は次に松村一人・寺沢恒信・山崎謙・森安一・森信成を批判する。「ナンセンス」「何

一つわかっていない」「毛沢東の、立体的で、事物を發展においてとらえる論理を、見るも無惨に歪小化して、平面的な、形而上学的な、概念の遊戯にってしまった」というのが新島の批評である。この批評はこのかぎりでは正しい。だが、この批評はそのまま新島の所説にもあてはまるのではないだろうか。

## 第8章 非敵対矛盾について

新島は本章の標題を「非敵対矛盾」としているが、名は体を表わすのであって、毛沢東的にいうならむしろ「矛盾における敵対の地位」(『矛盾論』6章標題)あるいは「矛盾における敵対性と非敵対性」と問題を設定しなければならない。これによって敵対が闘争性の一つの形態であることが明らかになるばかりではなく、非敵対もまたそうであることがわかる。つまり敵対・非敵対はともに闘争性の「形態」であり、「条件的」「相対的」であることが。

以上のごとくであるから、毛沢東のあげた「爆弾の例」も新島の言とはちがって、「解説者たちを困らせ、批判者たちを喜ばせる」ことにはならない(199ページ)。毛沢東を理解していない「解説者たち」だけが困るにすぎず、かれらが困るのは「爆弾の例」に限ったことではない。

新島は森信成の毛沢東批判に反批判しているが、有効な批判であるとはいえず、その主観的意図とはちがって、かえって毛沢東を矮小化してしまった。新島はまず「爆弾の例」は「弁証法の一般法則の例ではなくて」「弁証法の部分法則の例である」という(200ページ、傍点是新島)。弁証法に「一般法則」も「部分法則」もありはしない、ただ一つの根本法則＝矛盾の法則だけがある、というのが毛沢東の主張ではなかったか。

「爆弾の例」について具体的にいえばこうだ。爆薬の成分は相互依存＝統一の関係として存在する（内因）。爆弾は一定の条件（外因）のもとで爆発するが、爆発とは、爆弾という事物についてみれば、外因が内因を通じて作用したのであり、このとき矛盾の闘争性は非敵対的形態から敵対的形態へ発展したのである。

新島は次に「爆弾の例」が「もののたとえであって、『例証』ではない」などというが（200ページ）、新島式に言えば毛沢東が『矛盾論』であげた例はすべて「もののたとえであって、『例証』ではない」ことになってしまう。新島が別の個所（163ページ）で引用していることばを使えば「ロードス島はここだ、ここで跳べ」なのである。

以下れいによって混乱した思考を続けたのち、曰く「敵対的と非敵対的の区別が生ずるのは、解決の方法、闘争の形式が問題になる分野においてである」（203ページ）。毛沢東によれば、「解決の方法、闘争の形式」はすべての分野で「問題になる」のであって、この文章は文意不明だが、前後の脈絡から判断すると、要するに自然ではなく社会を想定しているらしい。

そして毛沢東の主張を次のように「整理」する。

1. 矛盾はすべて闘争性をもっているが、闘争性イコール「対抗性」ではない。

2. 「対抗性」とその反対概念である「非対抗性」は、本書『毛沢東の哲学』のこと——矢吹）第5章で分けたような矛盾の種類の上での区別でなくて、その解決＝消滅のしかたの二つの形態の区別である。

3. 対抗性は非対抗性に、非対抗性は対抗性にそれぞれ転化することができる。

4. 対抗性と非対抗性の相互転化にはそれぞれ「一定の条件」がある（204ページ）。

これがはたして「整理」なのであろうか。まず

1 について。闘争性＝「対抗性」でないのは全くあたりまえ。毛沢東がはっきり書いているように、対抗性も非対抗性もともに闘争性の形態なのだから。2 について。対抗性・非対抗性が矛盾の「解決＝消滅のしかたの二つの形態」だというのは正確な表現ではない。対抗性・非対抗性はなによりもまず矛盾の「闘争性の形態」であり、それだからこそ矛盾の解決の方法を規定することになるのであって、この逆ではない。新島の論理は転倒している。

3、4 を毛沢東は次のようにいっている。

「事物の具体的発展にもとづいて、矛盾は非敵対的なものから敵対的なものに発展するし、また敵対的なものから非敵対的なものにも発展する」。毛沢東はここで「発展（fāzhǎn）」ということばをよく使い、「互相転化（hùxiāng zhuǎnhuà）」を使わなかったことに注目せよ。「互相転化」とは矛盾の両側面の相互転化のことをいうのであり、混同を避けるためにことばを選んでいるのだ。新島は中国語についてあれやこれやのことをくり返して語っているが、こういう肝心なところはすっかり忘れているらしい。もう一つ念のために指摘しておく。矛盾の闘争性における敵対性・非敵対性の区別は、矛盾の同一性における同一性・不同一性とツイになっている点に注目せよ。いいかえれば、敵対性とは矛盾の闘争性の特殊な形態であり、不同一性とは矛盾の同一性の特殊な形態なのである。

新島は次に6ページ分の議論をしたあとで『人民内部の矛盾を正しく処理する問題について』を引き合いに出すが、依然混乱している。曰く「毛沢東はここで、敵味方の矛盾が（人民政権の成立等の条件のもとで）人民内部の矛盾に転化することもあるし、その逆もあること、また敵対的な矛盾が非敵対的な矛盾に転化することもあるし、その逆

もあることを主張している」(212ページ)。

新島には、敵対性・非敵対性という闘争性の形態にかかわるレベルでの規定と、敵味方・人民内部という具体的・実体的レベルでの規定との区別がつかないらしい。

「敵味方の矛盾が人民内部の矛盾に転化する」とはいったい何ごとであるか。新島が引用しているように毛沢東はこういったのである。「人民内部の矛盾は、勤労人民の間では非敵対的だが、被搾取階級と搾取階級の間では、敵対的な側面のほかに非敵対的な側面もある」。毛沢東がいったのは、人民内部の矛盾にも敵対的な側面があるから、処理が当をえないならば、敵味方の矛盾になるということだ。くり返していう、人民内部の矛盾は敵味方の矛盾に転化することがあるが、敵味方の矛盾が人民内部の矛盾に転化することは決してない。なぜか。「人民内部の矛盾に転化する」ような「敵味方の矛盾」はすでに「人民内部の矛盾」として把握されているからだ。毛沢東は「人民」「敵」という概念が歴史的なものであること、つまり異なる国、異なる時期に異なる内容をもつことを具体的に説明しているが、その意味が新島には「何一つわかっていない」のである。もう一度くり返していえば、敵味方の矛盾はつねに敵対的なものであり、非敵対的ではない。逆にいえば、つねに敵対的な矛盾をもつものを「敵」と規定し、それ以外を「人民」と規定するのである。したがって「敵味方の矛盾」のなかに「非敵対性」を「発見」することはできないのである。

#### 第9章 毛沢東の弁証法と竹内好氏の理解について

#### 第10章 毛沢東の弁証法と陰陽二元論

この2章についてのコメントは別の機会にゆず

ることにしたい。一つは「陰陽二元論」に不案内なためであり、もう一つは竹内の書いたものを読み通す時間がないためである。ただ、次の点だけは書きとめておきたい。「一勝一敗」の誤訳論議についてである。『矛盾論』に次の1節がある。

「兩軍相争，一勝一敗，所以勝敗，皆決於内因。勝者或因其強，或因其指揮無誤，敗者或因其弱，或因其指揮失宜，外因通過内因而引起作用」(甲種本，72ページ)。

「一勝一敗」を既訳はすべて「一方が勝ち，他方が負ける」と訳しているが，新島によれば「以上の訳はすべてまちがいである。……『一勝一敗』とは，勝ったり敗れたりすることである。これは中国語の用例を知る者なら誤訳のおこりようのない句である」(263ページ，傍点是新島)という。

新島は『礼記』や『史記』の用例を引いて自説の論拠としているが，これは論拠とはならず，新島の限界を暴露するだけである。つまり「一喜一憂」が「喜んだり悲しんだり」することで「こっちが喜び，あっちが悲しむ」ことでないのは当然であるが，これは主体が一つだからだ(新島のあげた文王や武王，漢の翟公の場合も同じ)。しかし，『矛盾論』の場合は，「兩軍」であり主体は二つなのである。当然既訳が正しい。

新島はどうしてこのような勇み足をしたのだろうか。曰く「いいかえれば，勝と負とは同時ではないので，したがってそのあとも，勝つときは，負けたときは，と訳すべきで，勝った方はと訳すのは誤訳である。しかも，これは，単純な誤訳とみなすわけにはいかない。『一方が勝ち他方が負けると訳すと，勝敗という矛盾は，同時的なものとなり，しかも，一方が勝ったとき他方が負けるのは当たり前すぎることであって，どうしてこれが『矛盾』になるのか，ふつうの読者はまったく理

解に苦しむであろう。既訳を文字どおり読むと、内因と外因の関係はまったくわからなくなる」(264ページ、傍点是新島)。ここもまた新島が誤訳で、既訳が正しい。新島の主張を読むと「ふつうの読者はまったく理解に苦しむ」ことになる。「しかも、これは、単純な誤訳とみなすわけにはいかない」のである。なぜなら、新島の誤訳はその『矛盾論』理解の必然的帰結なのであるから。すでに第5章のコメントでふれたことにかかわるが、この誤訳は新島の「矛盾の第2型論」に基づくのであり、しかもその破産を示すものでしかない。

「一方が勝ったとき他方が負けるのは当たり前すぎる」と新島はいうが、「当たり前すぎることを毛沢東は「矛盾」だといっているのである。先の引用文のあとで毛沢東は次のように説明しているのに、新島の目にははいらなかったのであろうか。

「戦争中の攻守、進退、勝敗都是矛盾着的現象。失去一方、他方就不存在。双方闘争而又聯結，組成了战争的總体，推動了战争的發展，解決了战争的問題」(甲種本，76ページ)。

新島の「詭弁」こそ、「毛沢東にとってはいいめいわくである」(265ページ)といわなければならないのではないか。

(注1) 武谷三男『ニュートン力学の形成について』(『弁証法の諸問題』所収、覆刻版、勁草書房、1966年)。なお、武谷のこの論文は『科学』1942年8月号で初めて発表されたが、故加藤正は1934年8月刊の『思想研究資料』特輯第15号ですでに認識の三段階論を展開していたにもかかわらず、「通常の哲学史的知識の提供するありふれた見解として、あえてこれを自己の創見とは認めなかったよう」だという。降旗節雄『歴史と主体性』(青木書店、1969年)、83ページ。

(注2) 武谷三男、97ページ。

(注3) 吉田光『科学基礎論としての『技術論』＝『実践論』』(武谷三男編『自然科学概論』、第2巻、勁草書房、1960年)、182ページ。ただしここでは新島の引用にしたがう。

(注4) 梅本克己『唯物論と主体性』(現代思潮社、1961年)、234ページ。

(注5) 吉田光、182ページ。

(注6) 森信成『毛沢東(矛盾論・実践論)批判』(刀江書院、1965年)、71ページ。

(注7) 寺沢恒信解説『毛沢東の矛盾論』(理論社、1954年初版)、77ページ。引用は1970年2月の第28刷による。

## XI 新島淳良著『毛沢東の思想』

### 第II部へのコメント

#### 第1章 毛沢東における弁証法の諸問題

新島はここで上山春平<sup>(註1)</sup>にならって、「弁証法的思考は二つの論理空間を前提とする」として、それぞれ「短い射程」≪長い射程≫と名づける(新島、135ページ)。

「戦術的には敵を重視し、戦略的には敵を軽視せよ」というのは毛沢東の一貫した主張であるが、新島はここでの「戦術的」「戦略的」をそれぞれ「短い射程」≪長い射程≫とよぶわけである。ここまではいい。だが、その次が問題だ。

新島曰く「(マルクス主義哲学の)階級性は相対的に「短い射程」から明らかにされた人間の認識の姿であり、(マルクス主義哲学の)実践性は相対的に「長い射程」から明らかにされた人間の認識の姿である」(139ページ)。

「人間の認識の姿」なるものを「短い射程」からみると「階級性」をもち、「長い射程」からみると「実践性」をもつ、というのはいかにも奇妙な議論ではないか。「敵を重視すること」と「敵を軽視すること」はたしかにツイをなすが、「階級性」と「実践性」とはいかなる意味でも「戦略・戦術」「長い射程・短い射程」の関係にはない。

新島の議論はいくつかの論理的飛躍のうえに成立しているのだから、それを追及してみよう。毛沢東

がマルクス主義哲学の二つの特徴として階級性と実践性をあげたのは周知のとおりであるが、ここでいう階級性とは「マルクス主義哲学がプロレタリアートに奉仕する」ことであり、実践性とは「マルクス主義理論が実践に奉仕する」ことであった。したがって、ここで毛沢東が述べたのはマルクス主義哲学のいわば目的(といっても必ずしも任意に設定されたわけではない)なのであって、「認識の階級性・歴史性」(階級的・歴史的制約性)を論じたわけではない。にもかかわらず新島はこれを後者のごとく拡大解釈し、階級性とは「階級社会における認識ということ」、実践性とは「人類の認識の発展ということ」だと理解して、前者を《短い射程》、後者を《長い射程》だというのである。

新島の曲解はさらに続く。「すでに言いふるされた議論だが、マルクス主義が階級的イデオロギーか科学かという問題は、毛沢東のこのような思考から弁証法的に解決される」「《短い射程》でみるとき……毛沢東の思想も階級的イデオロギーなのであり、……《長い射程》からみるとき、マルクス主義……のみが……客観世界……主観世界……を改造する思想方法(=科学)である」「マルクス主義を『科学』だといっているのは、イデオロギー性を否定しているのではないのだ」(139~140ページ)。

要するにマルクス主義も毛沢東思想も《短い射程》でみると階級的イデオロギー、《長い射程》でみると科学だというのが新島の考えらしい。ところで、新島のいう《短い射程》《長い射程》とはもともと相対的な関係にすぎず、長短に具体的な規定はないから、けっきょくマルクス主義も毛沢東思想も階級的イデオロギーでもあり、科学でもある、ということになる。くりかえしておけば、マルクス主義は科学かイデオロギーかという問い

に対する新島の答えは科学でもあり、イデオロギーでもある、というのである。もし新島の答が正しいのなら、科学かイデオロギーかという問い自体が無意味なことになるが、はたしてそうだろうか。新島にはどうやら科学とイデオロギーの区別がつかないらしい。もっとも、この問題はそう簡単ではないから無理もないのだが、さしあたり、次のような点だけは確認しておかねばならないのだ。

マルクス主義は《短い射程》でも《長い射程》でもイデオロギーであって科学ではない。科学は決してイデオロギーではない。しかしマルクス主義が科学的社会主義の理論とよばれるゆえんは、それが科学的に根拠づけうる理論だからだ。だが科学的に根拠づけられたからといって「主義」が「科学」になるわけではなく、マルクス主義はあくまでもイデオロギーであって科学ではない。毛沢東思想もむろんイデオロギーであって科学ではない。毛沢東思想の科学的解明こそわれわれの課題であるべきで、毛沢東思想の「党派的擁護」こそ排さなければならないのである。

新島は次に『実践論』の論理を検討する。これがまた混乱した議論である。新島の『実践論』理解の問題点については次の第2章のコメントでくわしくふれるので、ここでは2、3の無視できない点をあげるにとどめる。

新島曰く「端緒としての実践は、自らを『一分為二』する。つまり《社会的実践》が矛盾、対立の統一として把握される。それが《感性的認識》と《理性的認識》である」(143ページ)。新島によれば「社会的実践」は「矛盾として」把握されるのだそうだが、いったいその矛盾とは何と何の矛盾なのか。実践と認識が矛盾なのか、感性的認識と理性的認識が矛盾なのか、実践と感性的認識が

矛盾なのか、実践と感性的認識および理性的認識が矛盾なのか。新島の文章の「それ」が何を指すのかははっきりと明らかでない。また新島はこの混乱した文章でいったい何を主張しようというのか。毛沢東は「認識は実践に依存し、転じて実践に奉仕する」「理性的認識は感性的認識に依存し、感性的認識は理性的認識に発展する」といったが、この説明で十分ではないのか。

新島曰く(1)「実践と認識というばあい少なくとも感性的認識は『実践』としてとらえなければならず、理性的認識も『実践』である」(143ページ)。感性的認識・理性的認識をともに「実践としてとらえる」とはいったいいかなる意味か。なんのために「実践としてとらえる」必要があるのか。もし認識=実践ならば、実践→認識→実践は、認識→認識→認識というバカゲタものになってしまうではないか。

新島曰く(2)「理論と実践というばあいは、それぞれ理論活動、実践活動を指すことが多く、ふつう両者はべつの活動、べつの事物である。理論活動も実践活動も第1の意味における社会的実践であるが、理論活動と実践活動とは相互に異った活動、異った形態の実践だとみなさなくてはならない」(143ページ)。

理論と実践というばあいは、新島の言とはちがって、「理論活動」というよりもむしろ「理論活動の成果」あるいは「理論そのもの」であろう。理論実践もまた社会的実践の一つであること、理論実践が非理論実践と区別しうるのは当然だが、それを改めて書かねばならぬ理由はどこにあるのか。新島のいう「第1の意味」とはいかなる意味か。

(1)(2)の記述はそれ自体ほとんど意味がないかあるいは誤りであるが、新島がこれを書いたのは、

「実践と認識というばあいと実践と理論というばあいでは意味がちがう」(143ページ)と考えてそのちがいを説明するためであった。ところで、ちがいは明らかになったか。もし(1)のごとく「認識」さえも「実践」と呼ぶなら、(2)の理論活動・実践活動は、正真正銘の「実践」と呼ぶほかになく、すべては新島式「実践」にならざるをえないのである。

また曰く「感性的認識は、社会的実践のとり第1の形態である。……主体は客体によってさまざまに規定される」「そして……つぎの理性的段階にすすむ……かくして実践のとり第1の形態は否定される」(144, 145ページ)。認識が実践の「形態」である、とはいかなる意味か。実践はそれ自体の「形態」があるからこそ「主体」はそれを認識しうるのではないか。しかもこの感性的認識の段階においてさえ客体→主体の一方交通ではなく、客体が主体に映るとき、主体もまた多かれ少なかれ客体を映すのである。次に理性的認識の段階で「第1の形態」が否定されるのならば、それからどうなるか。理性的認識に基づく次の実践をどう説明するのか。もし理性的認識が「実践の第2の形態」ならば、「実践の第1の形態→第2の形態→実践」というこれまた無内容な、新島の排撃するプラグマティズムと同じものにならざるをえないのである。

新島また曰く、「『実践論』を注意ぶかく読めば、感性的認識と理性的認識はともに《社会的実践》の二つの段階にすぎず、《社会的実践》の外に、べつに《認識》なるものが成り立つのではない、ということがわかった筈である」(146ページ)。またしても認識は実践だと強弁する。こうなると「社会的実践」はもはやオマジナイだ。認識は実践から区別されるのであり、実践の段階ではないので

ある。

新島はまた「実践——認識——再実践」の公式は「存在——認識——存在」の公式とは「決定的に対立する」などと強調しているが（146～147ページ）、どこがどちらがうのかなに一つ説明していない。説けないのはあたりまえである。なぜなら、「人間の現実的生活過程」をマルクスが「社会的存在」とよび、毛沢東は「社会的実践」とよんだにすぎないのであるから。

さて新島はまだ混乱した議論を延々と続けるのであるが、われわれの忍耐力はもはや限度に達した。一服しよう。

## 第2章 二つの反映論と『実践論』

新島はここでフォイエルバッハ・エンゲルス・レーニンの唯物論を「第1の反映論」、マルクスのそれを「第2の反映論」とよび、毛沢東の『実践論』は両者の「統一」であるというはなはだ奇怪な主張を展開している。

新島はまずエンゲルスの『フォイエルバッハ論』について「古き問題意識」「おそるべきマルクス主義の歪曲」「マルクス(の)完全な誤解」「ヘーゲル『弁証法』をこじつける試み」「フォイエルバッハ主義者だったマルクスに本卦がえりした」などと書いている。だが、「完全な誤解」とか「おそるべき歪曲」という表現は、おそらく新島のエンゲルス理解に対する批評として最もふさわしいのではないだろうか。

新島はエンゲルスの次の文章を引用する。「……いずれの哲学者の妄想に対しても、そのもっとも痛烈な反駁は実践であり、すなわち実験と産業とである。もしもわれわれが、ある自然的事象そのものを、われわれみずからでつくり、それを、その諸条件から発生させ、のみならずさらに、こ

れをわれわれの目的に役だたせることによって、そうした自然的事象に関するわれわれの認識のただしさを証明することができるならば、カントが不可認識的だとする『物自体』もなくなってしまう」（国民文庫版、27～28ページ）。

この引用文について新島はあれやこれや混乱した議論をくり返している。曰く、ここでいう「実践」とは「存在なのか思惟なのか」、「実践」は「思惟と存在の同一性の検証としての意味をもつ……だけである」等々（165ページ）。新島にはどうやら行間の論理は読みとれないらしい。たとえばエンゲルスの用語を毛沢東のそれにおきかえてみよ。

「妄想」→「認識」、「実験と産業」→「生産闘争・階級闘争・科学実験」。単なるオキカエではない。毛沢東がエンゲルスを読むように、エンゲルスを読もうというにすぎない。

もう一つ材料を出そう。『実践論』に曰く「人類認識的歴史告訴我們、許多理論的真理性的不完全的、經過實踐的檢驗而糾正了它們的不完全性」（甲種本、60ページ）。

これでも新島はまだ次のように強弁するのであろうか。「エンゲルスが『実践』こそ同一性の試金石だというとき、われわれは、存在と思惟の同一性いかん、という問いのだしかたが誤っていたことを知るのである。つまり、問いそのもののなかに、『実践』がなければならなかったことを知るのだ」（165～166ページ）。

「実践こそ同一性の試金石だ」というのはエンゲルスだけでなく毛沢東も同じことをいっているではないか。「存在と思惟の同一性いかんという問いのだしかた」は決して誤りではない。ところで「問いそのもののなかに『実践』がなければならぬ」という文章は文意不明であるが、後のほうを読むとマルクスの「フォイエルバッハに関する

テーゼ」の冒頭のことばが引用されていることから、新島もまた「主体的唯物論者」の亜流であることがわかる。

第1テーゼの第1句「従来のすべての唯物論の主要欠陥は、対象や現実性や感性を……実践として把握せず、主体的に把握しなかったことである」（新島の引用による）はいかなる意味か。この1句は故加藤正の解釈によれば次のとおり。「対象を主体的に把握しない」というのは、「人間的活動を対象としない」の意である。つまりフォイエルバッハの唯物論は、人間の社会的・歴史的实践までは対象としえず、その対象は自然にとどまった、したがって歴史・社会の領域は依然観念論が支配していた。いいかえれば、唯物論には実践的・主体的唯物論なるものと客観的・観想的唯物論なるものがあるのではなく、唯物論は本来実践的な認識である。マルクスのテーゼは唯物論の対象領域をさしたのであって、認識方法を規定したのではないというわけである<sup>(註2)</sup>。

こういうわけで新島の好きな「実践として把握」するというオマジナイは完膚なきまでにうちくだかれるのである。

だが、新島のエンゲルス非難は続く。エンゲルス曰く「われわれは、現実の事物を絶対概念のあれこれの段階の模像と解するかわりに、逆に、われわれの頭のなかの概念を、ふたたび唯物論的に、現実の事物の模像として把握した。……これによって、概念弁証法そのものは、現実的世界の弁証法的運動の意識された反映にすぎないことになった」。新島曰く「もし思惟に『弁証法』があるならば、それは自然の反映（模像）でなくてはならぬ、すなわち自然の発展のしかたが『弁証法』的なものでなければならぬ、というわけだ。ヘーゲルの『弁証法』が『合理的な核』をもっていたのは、

それが自然の『弁証法』の模像だったからだ、ということになる」（167～168ページ）。

全く「おそろべき」読み方だ。こうなると、もはや評言を知らぬというほかない。いうまでもなくヘーゲルは「概念の弁証法の模像が自然の弁証法である」といったのに対し、エンゲルスはそれを転倒させて「自然の弁証法の模像が概念の弁証法である」といったのである。「エンゲルスの説明を文字どおり読むならば、ヘーゲルはちっともさかだちさせられていない」（新島）のではなく、「さかだちさせられている」のである。「いる」と「いない」とではまるで正反対ではないか。

シロをクロといいくるめるような新島の非難はレーニンの『唯物論と経験批判論』にもむけられる。曰く「エンゲルスに向けられたさきの私の非難は、すべてレーニンにも向けられねばならない」（173ページ）。

こうして新島式「二つの反映論」が成立する。「わたくしはフォイエルバッハまでの唯物論、したがってエンゲルスとレーニンにもあらわれている『反映論』を第1の反映論とよび、マルクスの『反映論』を第2の反映論とよぶ。マルクス主義の『反映論』とは第2の反映論を指すのであって、第1の反映論ではない」（175ページ）。

新島は「二つの反映論」なる新説を提起したわけだが、当然のことながらすべて無内容である。マルクスと区別されるのはフォイエルバッハ・エンゲルス・レーニンなのではなく、フォイエルバッハがマルクス・エンゲルス・レーニンから区別されるのである。そのちがいは、フォイエルバッハが唯物論の対象を自然だけに限定したのに対し、マルクスらは社会・歴史をも唯物論的に解釈した点に存するのだ。

忍耐に忍耐を重ねてもう少し新島のいうところ

をきこう。新島は『ドイツ・イデオロギー』の初めの部分を引用している。「マルクスは意識を単なる自然の反映とといったのではなく、『現実に活動している人間の現実の生活過程』の反映だとしたのである。マルクスのいう『存在』は、彼以前の哲学者のいう『存在』ではなく具体的な活動しつつある人間存在を指していたのである。エンゲルスとレーニンはそのことをとんでもない読みちがえをした！」(175ページ)。

新島のエンゲルス・レーニン理解こそ「とんでもない読みちがえ」というべきではないのだろうか。自分の読みちがえと他人の読みちがえとは、はっきり区別しなければなるまい。

新島の曲解はとどまるところを知らず、ついにはマルクスの限界まで論ずる。曰く、「だが、第2の課題についてはマルクスはついにあきらかにすることをしなかった。……実践と認識の関係の形式面———どういう実践が正しく、どういう実践がまちがっているのか、どういう実践から正しい思惟が生まれるのか、どういう実践から正しくない思惟が生まれるのか、逆にどういう思惟が正しい実践を生むのか、どういう思惟は正しくない実践を生むのか、といったことは何一つ明らかにされなかった。いいかえれば第2の反映論はまだ不完全であったのである。この面を完成させて真の史的唯物論を発展させたのが毛沢東である」(177ページ)。

新島のいう「第2の課題」なるものは「現実の生活過程からいかにしてさまざまな意識が生まれるか、という問題」であるが、この「課題」にマルクスははたして答えなかったのであろうか。新島に問う、マルクスはいったい何のためにあの『資本論』を書いたのか。資本主義社会の変革のために、変革の対象とその主体とを正しく認識するた

めではなかったか。正しい実践のために、正しい対象認識を求めたのではなかったか。「マルクスにあっては“認識論”は史的唯物論のなかにふくまれてしまう」(140, 176ページ)、と新島は2度もいう。この記述は正しい。だが、その内容を新島は皆目理解していない。レーニンのように『資本論』こそある意味では認識論なのであり、マルクスは『資本論』とは別に認識論を書くことをしなかっただけのことである。レーニンの『哲学ノート』、毛沢東の『実践論』のマルクス主義哲学史における位置づけはもとより重要な作業であるが新島のごとく誤解のうえに誤解を重ねることによって、「誤謬の合成」にしかならないであろう。

かくて、わが新島は「実践論の意義」を論ずるのであるが、その意義を論じきれぬことはいうまでもない。例の「二つの反映論」が柱になっているのであるから。新島は『実践論』からあれやこれやの文章を引用して、マズイ解説を行なっている。だが『実践論』の真の意義はその論理的内容自体にあるというよりも、その論理を使って「教条主義」「経験主義」を実践的に克服していったことにあるのだ。これこそ実践論の意義・実践論の実践的意義にほかならないが、こういう肝心のことを新島はすっかり忘れてらしい。こういうのが新島の理解する『実践論』なのである。

第3章 『矛盾論』における「側面」について  
新島はまず「言語上の分析」を試みる。『実践論』『矛盾論』のなかから「方面(fāngmiàn)」を拾いあげ、その訳語を検討する。だが、この「言語上の分析」なるものを通じて明らかになったのは、毛沢東が「両方面(liǎng fāngmiàn)」と「各方面(gè fāngmiàn)」=「諸方面(zhū fāngmiàn)」とを区別して使っているという事実の確認だけである。なお、小

さなことだが、新島は第4章の表題を「主要的矛盾和矛盾的主要方面」と書いているが（188ページ）、これは「主要的矛盾和主要的矛盾方面」の誤記である。

次に新島は「思想的分析」と称してエンゲルスとレーニンからの引用を検討する。新島のここでの主張が例によってかなり混乱したものであることは、哲学の門外漢であるわたくしにさえ容易に見破ることができる。

新島曰く「エンゲルスは運動と生命を挙げるが、その論理はなかばヘーゲルのものである／エンゲルスの『反デュリング論』においておこなった運動に関する説明は、完全にヘーゲルの、思弁的であってヘーゲル論理学にしたがっている／エンゲルスはここでヘーゲルの問題意識でヘーゲルの用語を用いて、ヘーゲルの対象をあつかっているのである／レーニンの場合も同様である／このエッセイ全体（『哲学ノート』をさす——矢吹）がヘーゲル讃歌である／筆者はレーニンが唯物弁証法というものをこの1915年には理解していなかったのではないかと疑っている／……レーニンの感想であるが、ここでマルクスの『資本論』の方法がレーニンにはまったくわかっていないこと、ここにあるのは完全なヘーゲル的理解であることがバクロされる／これを（『哲学ノート』をさす——矢吹）唯物弁証法の聖典視するのはレーニンにとってもたいへんめいわくなことにちがいない」（196～201ページ）。新島に問いたい。レーニンが「唯物弁証法というもの」を理解するようになったのはいつからですか。『実践論』『矛盾論』には『哲学ノート』からの引用がそれぞれ3カ所、9カ所あり、しかもすべて肯定的な引用ですが、この事実をどう説明するのですか。

新島は第3に「主要・次要の区別の意味」を論

ずる。『方面』とは具体的事物の『方面』だと説くが（20ページ）、「方面（fāngmiàn）」が事物の「方面」をさすばかりではなく、矛盾の「方面」でもあることは「矛盾方面」という1語からだけでも明らかではないか。新島は毛沢東が矛盾の両側面の相互転化をのべた個所を引用している。「これを読んで気がつくことは、神秘的なところがまったくないということである。／これがレーニンにもエンゲルスにもスターリンにもわからなかったのはなぜか。それは矛盾の両側面を、ヘーゲルのように、モメントとしてしか把握しなかったからにほかならない」（203ページ）。

「神秘的なところがまったくない」はずなのに、新島には事物とは何か、事物と矛盾の関係、矛盾の側面がまるでわかっていないのである。次の文がその証拠である。「毛沢東の論理では、第1に、質変において変るのは主要な位置を占めていた側面（事物）が副次的側面になり、副次的な位置を占めていた側面（事物）が主要な側面になるだけで、古い質の両側面である『事物A』と『事物B』は新しい質の両側面として残ることが明らかになった」（206～207ページ）。

「事物A」と「事物B」は「古い質の両側面」であり「新しい質の両側面」であるというが、二つの「事物」からなる「古い質」「新しい質」とはいったい何の「質」なのか。もし「事物の性質」だとしたら、ある事物の性質が二つの事物によってきまるといふ妙なことになるであろう。要するに「主要な位置を占めていた側面」「副次的な位置を占めていた側面」とは、「事物」ではなく「事物の側面＝矛盾の側面」と考えなければならないのだ。「両側面の相互転化」が「力の増減の度合いによって決定される」とはいつても、これはきわめて抽象的・原理的レベルの話で、「力の増減」

を具体的・実体的に計量することなどできない相談なのだ。したがって新島のごとく両側面の増減・不変について八つのケースを想定するのはナンセンスであり、毛沢東の説明「相互依存の場合は量的変化、相互転化の場合は質的变化」で十分なのである。たとえば「困難な条件」と「有利な条件」とが矛盾しており困難が矛盾の主要側面だという場合、「力の増減」をどのようにはかるというのか。

新島は最後に「『方面』は二つか」と問い、「現実の一つの矛盾はふつう二つの『方面』をもつが、場合によっては二つ以上の場合もありうる」（209ページ）と答える。これはまたなんと無内容な議論であることか。24ページにわたる第3章の結論が事実の単なる説明、しかもきわめて不十分な説明にすぎないとは。

われわれはこの問題に対する必要かつ十分な答えを次のように整理することができる。矛盾の諸側面とは、主要・非主要の区別とは無関係に矛盾の諸側面をありのままにとらえることであり、矛盾の両側面とは、諸側面を主要側面・非主要側面に区別してとらえることである、と。

第4章 毛沢東における史的唯物論の発展

新島はまずエンゲルスの『フォイエルバッハ論』を検討する。れいによって混乱した議論であり、読み通すにはかなりの忍耐力を要するが「病いを治して人を救う」ことが必要であるから、どこが誤りであるかをみていくことにしよう。

エンゲルスは、自然史と社会史がある一点で決定的に異なることをあげ次のようにいう。「社会の歴史においては、そこで行動しているものは、ただまったく意識を賦与され、考慮または情感をもって行動し、一定の目標を目ざして努力すると

ころの人間のみである。そこでは、意識された企図、意欲された目標なしには、なにごととも発生しない。……人間はその歴史をつくる。よしその歴史がどのようなものになるにせよ、人間各自が各自の意識的に意欲している目的を追うことによつて」（国民文庫版、60～62ページ、新島212～215ページ）。

新島曰く「エンゲルスの右の文章は（また『フォイエルバッハ論』全体をつうじて）、人の行動（実践）がすべて意識的な行動であるという前提に立っている。これは一種の観念論であることをまぬがれぬ」（214ページ）。

人間の行動を「意識的」だということがどうして観念論なのか、われわれは理解に苦しむが、新島の頭の中にはどうやらこういうことになっているらしい。(1)自然は意識されない「作用力の交互作用」ばかりで成り立つ。(2)社会は意識されない「作用力の交互作用」のほか、意識された行動からなる。(3)、(2)の前者が「法則」を成り立たせ、後者が「法則」をかきみだす。(4)、(2)の後者が「法則」をかきみだすのはやっかいだから、エンゲルスは「個々の意志の衝突」によって後者をゼロと考えた——（214～215ページ）。

こういう奇妙な錯覚に基づいて、新島はあれやこれやエンゲルスを批評するのである。曰く「エンゲルスの問題のだしかたは、じつは巧妙に特定の答えしか出ないようにしくまれている」（213ページ）。つまり、意識的な行動→個々の行動の衝突→社会の法則というのがエンゲルスの論だが、第1に意識されない行動を無視したのはけしからぬ、第2に意識されない行動を無視しなければ個々の意志の衝突はもちだすまでもなかった、第3に、以上の2点は「社会法則と自然法則の差についての真の問いを避けるためのペテンにほかならない」

(215ページ)と新島はいうのである。

エンゲルスと新島のどちらが「ペテン師」であるかは、読者の判断に委ねることにして先を急ごう。エンゲルスが人間の行動を「意識的」といったのは、たとえば動物と比べての話であり、新島のいう「意識されない行動」なるものもここでは「意識的行動の一形態」にすぎないのだ。「社会法則と自然法則の差」を明らかにするためにこそ「人間の意識」を問題にしたのであることは明白すぎるほど明白ではないか。また『「意識された行為」』があって『法則』をかきみだす(215ページ)のではなく、「意識された行為」の合成結果こそが法則なのだ。新島の頭の中ではすべてが倒錯しているらしい。

新島は最初の引用の最後の部分についてまた曰く「エンゲルスは個人の意欲が歴史をつくる、という明々白々な観念論を主張している。エンゲルスはここで『法則』が成り立つということを主張したいあまり、唯物論を忘れてしまったのである。……後述するようにわたくしも『法則』は成り立つと考えるが、それはあくまで弁証法的唯物論の原則に立った史的唯物論の『法則』である。しかし、エンゲルスのこのようなやり方からでてくる『法則』は『個々の意志』が究極的には歴史をつくるという観念史観の『法則』なのである」(215~216ページ)。

新島よ、文章を書く場合にはよく考えてからにしてほしい。人間の意欲が歴史を作らないとしたら、いったい歴史を作るのは何なのか。新島も引用しているように、エンゲルスは「個々の意志の動因の背後にさらにどのような推進力が存在しているか」を問うているのだ。「弁証法的唯物論の原則に立った史的唯物論の『法則』」はエンゲルスがまさにこの『フォイエルバッハ論』におい

て全面的に明らかにしたのではないか。つまり、フォイエルバッハまでの唯物論が自然を対象としただけで、社会・歴史の領域は観念論の最後の逃避場であったのに対し、マルクス・エンゲルスは対象領域を自然だけでなく社会・歴史まで拡張したのである。このような歴史の過程に対する唯物論的把握こそ唯物史観であり、この唯物史観は資本主義社会の成立と発展の過程の研究『資本論』から得られたのである。いいかえれば、近代社会になってはじめて「歴史の原動力」が「単純化」して示されることになり、歴史的運動の「原動力」が経済的階級関係(社会的生産力と生産関係の関連)にあることが歴史的現実として、「なんびとも、ことさら目をふさがないかぎり」承認せざるをえない事実として現われたのであり、この事実をありのままに承認することこそ唯物史観なのである。もっとも、社会・歴史は、つねに「意識された意図、意欲された目標」をとおして結ばれる人間関係であるから、自然過程とは本質的に異なる面をもつ。しかし、経済過程が全面的に商品経済をとおして実現される資本主義社会においては、人間関係が個人に対して「外的必然」的過程としてあらわれることになり、こうして、基本的に自然過程と同じく、人間関係を対象とする客観的理論的把握が可能となるのだ。

新島曰く「歴史において、第1、『究極の規定的要因は現実の生命の生産と再生産とである』という法則は、いかにして証明されるか」(219ページ)。新島によると「エンゲルスはこの第1の問題の解決法をまちがえ」(220ページ)なのだそうである。「人間は『歴史をつくり』うるためには、生きてゆくことができなければならぬ……ところで生きるのに必要なのは、なによりもまず食うこと、飲むこと、着ること、そのほかなおいくつか

のことである」(註3)という自明の事実を事実として認めよということこそマルクス・エンゲルスの基本的主張ではなかったか。

新島曰く「第2, 究極の要因とその他の要因の関係はどのような『法則』にしたがうか」(219~220ページ)。新島によればエンゲルスは「第2の問題についてはなにひとつ答えなかった」のだそう。曲解もここまでくるとむしろご愛嬌とでもいうほかない。地下のエンゲルスは新島の批評に何と答えるであろうか？

新島は次に毛沢東が『矛盾論』で生産力と生産関係、理論と実践、経済的土台と上部構造を論じた部分を引用して、これまた奇怪な解釈を行なう。

毛沢東は土台と上部構造の関係について哲学的＝矛盾論的考察を行なっているわけだが、新島は土台を経済活動、上部構造を政治活動、文化活動とおきかえ、毛沢東のいう「作用(zuòyòng)」を「力」と翻訳し、両者の「力の比較計量」なるものを試みる。

まず個人のばあい。曰く、ある大企業の平サラリーマンがある日弾圧を予想されるデモに参加したとすればかれのばあいは上部構造が主要な、決定的作用をしたのであるし、デモにはゆかず会社に行ったとすれば土台が主要な決定的な役割をはたしたのである(223ページ)。

つぎに社会のばあい。無数の個人の無数のさまざまな行動は、無数の平行四辺形をつくり、その合成力間の相互作用によって歴史がつくられる。個人のばあいは行動を現実化する力の大小であるが、社会のばあいは現実化された力の大小である。個人と社会はそこがちがう(224ページ)。

新島よ、冷静に考えてみよう。経済活動・政治活動の「現実化する力」・「現実化された力」なるものは、いったい何を基準に(いかなる単位で)計

量しうるといえるのか。新島によれば、毛沢東は「哲学的にでなく科学的に、観照的にでなく実践的にこの問題を解決した」(220ページ)のだそうであるが、もしそうなら、「力の比較計量」学なるもの内実を「科学的に、実践的に」説明してほしい。

理論と実践についても新島の説明は基本的に同じである。「主要な側面と副次的な側面を区別するためにはべつな事物が存在し、その力を比較できなくてはならない。……毛沢東がここで問題にしているのは、『理論』活動と『実践』活動のことである。これは明らかに異ったべつべつの事物である」(227~228ページ)。

「理論活動」と「実践活動」がもし異なった二つの事物であるなら、この二つの事物の関係は矛盾ではなく、したがって主要な側面と副次的な側面の相互転化などありえないのだ。そもそも矛盾とはホコとタテという「二つの事物」の関係ではなく、ホコとタテは矛盾という一つの事物の二つの側面なのである。新島にはこういう最も肝心のところがよくわかっていない。だからくわしい説明をすればするほど欠点が出てくるという不幸なことになる。

新島は最後にスターリンの「史的唯物論」批判を行なうが、論理的な批判になりえていないことはいままでもない。新島は章末でいう。「毛沢東思想は現代の史的唯物論において、もっとも鋭くスターリン主義の欠陥を衝いたものであり、マルクス主義とは無縁なスターリン『史的唯物論』の破産を宣告し、マルクス主義を現代に生かし、発展させたのである」(237ページ)。

毛沢東思想が「スターリン主義の欠陥」を衝き、「マルクス主義を現代に生かし、発展させた」という指摘はこのかぎりでも支持しうる。だが問題は、「欠陥の衝き方」「発展のさせ方」がすぐれて毛

沢東的・中国的であることなのだ。その内的構造を解明することこそ新島の課題であつたはずなのに、ほとんどそれに成功してはいない。マルクス・エンゲルス・レーニンの誤読のうえに、毛沢東の誤読を重ねたところで、「史的唯物論の発展」を論ずべくもないことは火を見るよりも明らかである。

## 第5章 「敵対矛盾」と「敵味方の矛盾」

新島はまず「敵対的矛盾」と「敵味方の矛盾」とはどちらがうのか(238ページ)、と問うが、この問いの出し方がそもそもまちがっていることはすでに指摘した。念のためにくりかえしておけば次のとおり。敵対的・非敵対的というのは矛盾の闘争性の形態であり、いわば原理的・抽象的規定である。これに対し、敵味方の矛盾・人民内部の矛盾というのは、社会における現実的・具体的レベルでの矛盾のとらえ方である。

新島は「一般の理解では敵対矛盾とは、自然と社会の双方についていわれ」(238ページ)と書くが、これこそたんに「一般の理解」なのではなく毛沢東的理解であることに注目せよ。

次に『敵味方の矛盾』と対をなすのは『人民内部の矛盾』である。人民がでてくる以上、これは社会にしかあてはまらない(238ページ)と書くがこれは二重の意味で誤りである。第1に、矛盾の敵対性・非敵対性という概念で社会的矛盾をとらえたのが敵味方・人民内部の矛盾という概念なのであって、新島の表現は論理が逆であること。第2に、敵対性・非敵対性という概念は自然にも適用しうること。たとえば、動物社会にも「敵味方」は存在するのだ。植物社会でも同じこと。

ここで新島は『毛沢東の哲学』第8章について「自己批判」をする。だが、不幸なことに、誤り

は改められるのではなく、拡大再生産されている。まず第1に、「社会矛盾のなかで対抗性であるのは、国家権力をだれがにぎるかという争いに関するばあいだけである」(240ページ)というが、これは過度の限定である。つまり「国家権力をだれがにぎるかという争い」だけが敵対性をもつのではない。たとえば右翼暴力団が官憲の手入れに対して武力で妨害するとしたら、その矛盾は敵対的なのだ。かれらが権力奪取を想定しなくとも、である。もし国家権力との関係をいうのなら、社会矛盾は程度の差こそあれすべて無関係とはいえない。「思想闘争もその政権の性格変更と無関係のばあいは非対抗的であり、その政権の性格変更と関係するばあいは対抗的となる」(240ページ)というが、「関係・無関係」は相対的なカンケイにすぎないのではないか。

次に、新島は「都市と農村の矛盾も、その矛盾の片方が国家権力の性格に照応しており、片方がそれに対立しているばあいに対抗性となり」(241ページ)と書いているが、この「ばあい」は「都市と農村の矛盾」というよりもむしろ「国民党支配地区と解放区の矛盾」なのである。毛沢東が主張したのは、都市と農村の矛盾が資本主義社会・国民党支配地区においては敵対的、社会主義社会・解放区においては非敵対的、ということであり、それ以上でも以下でもない。ただし、非敵対的矛盾は敵対的矛盾に発展するし、その逆もありうるから、社会主義社会・解放区において都市と農村の矛盾が非敵対的であるというのも、「政策に重大な誤りがなければ」という条件付きであることはいうまでもない。

こういうわけでわれわれは新島とちがって「国家権力ということを中心とすると、毛沢東の出した例はすべて妥当な解釈がつく」(240ページ)と考

えるわけにはいかない。毛沢東は概念の説明のために具体的な例を示したのであって、ほかの例を示すことも当然可能であったのである。限られた具体的な例から概念の本質を逆に規定することはできない。AならばBであるとしてもBは必ずしもAではないのだ。

第2に、新島は「自然にこのことがあてはまるか」(241ページ)というはなはだ奇妙な問題を出す。「このこと」とは、国家権力の問題である。曰く「対抗と非対抗を社会の例で考えるかぎり、政権の問題をぬきにはできない。しかしそうなると自然に対抗・非対抗をみとめることができない。これは二者択一である。私はこのさい、『矛盾論』第6章の自然について書かれた部分を否定すべきだと思う」(241ページ)。

新島は自縄自縛に陥った。ふとした思いつきのために。だが、これは「二者択一」なんかではありはしない。「社会の例で考えるかぎり、政権の問題をぬきにはできない」ことをかりに百歩ゆずって認めるとしても、「自然に対抗・非対抗をみとめること」は「できる」のだ。毛沢東のあげた爆弾の例がそれであり、したがって『矛盾論』第6章の「自然について書かれた部分」を否定する必要は全くない。

『毛沢東の哲学』において「量的発展」を軸にして「対抗・非対抗を説明しよう」として失敗した新島はいままた「国家権力」なる思いつきを持出して再び失敗したわけである。われわれもむろん「毛沢東のかいたものは一字一句も反対できないという思想上の事大主義」(241ページ)に反対する点では人後に落ちないつもりである。しかし、毛沢東の論理が正しいばあいには、修正の必要はないし、修正のほうが誤りなのだ。

新島は次に人民内部の矛盾についてまたも混乱

した主張を続ける。たとえば『敵味方の矛盾』は『敵対矛盾』をより精密にした概念なのである」(242ページ)と説くが、もとより両者のちがいは「概念としての精粗の差」などではない。曰く「敵の内部矛盾には非敵対的なものもあれば、敵対的なものもある」(244ページ)。新島の誤解はここまでエスカレートした。敵に内部矛盾があることは当然で、人民はそれを利用することができる。だが、その「敵対性・非敵対性」を論じたところで、いったい何の役に立つというのか。新島のいう「敵対的・非敵対的」いずれにせよ、人民の立場からみれば敵対的なのだ。敵味方の矛盾はつねに敵対的であり、それを忘れたこういうスコラ的な議論こそ「毛沢東思想の魂を失なった」(241ページ)典型といわねばならない。

労働者階級と民族ブルジョア階級との階級闘争を毛沢東が「人民内部の階級闘争」と把握した点に、新島は「理論的あいまいさと、政治的リアリズム」をみている(245ページ)。

新島のいう「理論的あいまいさ」とは「社会主義革命の時期には、権力との関係をぼかしている」(246ページ)ことだが、毛沢東は「権力との関係をぼかしている」のかどうか。新島は民族ブルジョア階級が「1949年に全国的に成立した権力によって抑圧されるのかされないのか」(246ページ)と問うが、それに対する毛沢東の答は新島が引用しているとおりであって、いささかの「あいまいさ」もない。つまり、かれらが労働者階級を搾取して利潤を取得するという意味では「制限・改造」の対象となり「抑圧される」が、憲法を擁護し社会主義改造を受け入れるという意味では「抑圧されず」「団結・批判・教育」の対象となる。一言でいえば、民族ブルジョア階級の二面性であるが、この論理がどうして「理論的」に「あいまい」で

あるのか。毛沢東がここで説いているのは、まさに「抑圧・被抑圧」という二者択一の論理によっては、中国の民族ブルジョア階級をとらえきれぬということなのだ。したがって「処理が当を得るとは、民族ブルジョア階級が権力をにぎらないようにする」(247ページ)だけでは全く不十分なのであって、積極的に社会主義改造を推進することが必要条件なのである。

民族ブルジョア階級を「被支配階級なのだ、ということを露骨に言わない」(247ページ)ことが「政治的リアリズム」なのではなく、あえていえば「支配階級の一員」と考えているからにほかならない。「あえて」と断わる必要があるのは、人民が支配階級であり、民族ブルジョア階級が人民内部に属するとすれば、民族ブルジョア階級は支配階級の内部に含まれる、という論理においてそうなのだ、という意味である。

(注1) 上山春平『弁証法の系譜』(未来社, 1963年), 21ページ。

(注2) 『加藤正全集』(第2巻, 現代思潮社, 1963年), 9ページ以下, および降旗輝雄『歴史と主体性』, 98~99ページを見よ。

(注3) マルクス・エンゲルス著・古在由重訳『ドイツ・イデオロギー』(岩波文庫, 1956年), 34ページ。

## XII 『実践論』の論理構造

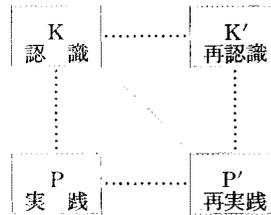
唯物弁証法の根本法則は「対立統一(duìlì tóngyī)」(対は2であり1である, の意)である, というのが『矛盾論』の主張であったが, 『実践論』のなかでは, 弁証唯物論の認識論=実践論を, 「実践・認識・再実践・再認識」と総括している。『実践論』の末尾に曰く――

「通過実践而発現真理, 又通過実践而証実真理和發展真理。從感性認識而能動地發展到理性認識, 又從理性認識而能動地指導革命実践, 改造主觀世

界和客觀世界。実践・認識・再実践・再認識, 這種形式, 循環往復以至無窮, 而実践和認識之每一循環的内容, 都比較地進到了高一級的程度。這就是弁証唯物論的全部認識論, 這就是弁証唯物論的知行統一觀」(甲種本, 65ページ)。

毛沢東によれば, この一節が『実践論』=認識論のすべてなのであるから, われわれはこの一節を理解することによって, 『実践論』の論理的内容を確実に把握できる。

実践を P, 認識を K とおけば, 先の総括は  $P \rightarrow K \rightarrow P' \rightarrow K'$  と表現できる。中国語, 毛沢東の論理は立体的構造をもつので, P, K を次のようにおく。



さて, 毛沢東はこの四つのことばで基本構造を説明するのである。毛沢東の説明をきこう。

(1) 「通過実践而発現真理」。この一句は図でいえば  $P \rightarrow K, P' \rightarrow K'$  のことであり, 認識の実践に対する依存性を述べている。

(2) 「又通過実践而証実真理和發展真理」。この1句は図でいえば  $K \rightarrow P' \rightarrow K'$  のことであり, 認識 K の正しさを検証するものが実践 P' であること(証実真理), 認識 K は実践 P' を経て認識 K' へ発展すること(發展真理)を述べている。

(3) 「從感性認識而能動地發展到理性認識」。認識は  $K \rightarrow K'$  と發展・深化するが, この場合 K が感性的認識(事物の現象的・一面的認識, 感覚と印象の段階)であり, K' が理性的認識あるいは論理的認識(事物の本質的・全面的・内部構造的把握)である。感性的認識 K から理性的認識 K' への發展を認識

の能動作用とよぶ。

(4)「又従理性認識而能動地指導革命実践」。こんどは認識 K を理性的認識とみれば P' は革命的実践となる。K→P' は革命のための・意志的实践であり、これも認識の能動作用である。

(5)「改造主観世界和客観世界」。K→K' は認識の発展であり、P→P' は実践の発展であるが、この両者がそれぞれ主観世界の改造、客観世界の改造である。

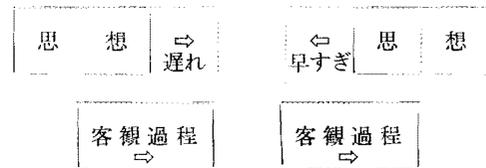
『実践論』の基本的論理構造は以上で尽きる。ごらんのようにきわめて単純・明快である。真理は元来単純・明快なものであり、毛沢東の『実践論』も真理なるがゆえに単純・明快だ、とっていいのかもしれないが、毛沢東の『実践論』を論理そのものとしてだけとらえたとすれば、きわめて不十分であろう。毛沢東の merit は、この単純な真理を述べたことにあるのではなく、この真理を活用して、教条主義・経験主義を克服したこと、いかえればこの真理で中国人民を武装し、中国革命を成功させた点にこそある。つまり主観世界の改造であり、客観世界の改造であり、一言でいえば、実践である。ここでの実践が認識の改造・対象の改造の双方を含むことはいうまでもない。というよりも、認識の改造=対象の改造だ、と毛沢東はいうのである。

論理の解剖は以上でおしまいが、この真理を毛沢東がどのように活用したのかを『実践論』という現場に範囲を限定して若干みておくことにしたい。それは『実践論』の実践的意義をみることになる。

第1は正しくない思想の批判である。批判の対象としてとりあげられるのは、理論主義・経験主義・右翼日和見主義・極左冒険主義の四つである。

理論主義とは理性的認識 K' が感性的認識 K に依存することを認めず、K' のみを承認する考え方である。経験主義とは感性的認識 K が理性的認識 K' に発展することを認めず、K のみを承認する考え方である。両者とも K→K' の過程を認めない点では共通しているが、ちがいは前者が K'→K' であるのに対し、後者が K→K' であることだ。

右翼日和見主義と極左冒険主義はともに認識（主観・思想）の発展と客観過程（認識対象）の発展段階のズレに起因する。



上の左図のように客観過程の発展に対し思想が立遅れている情況、右図のように思想が行過ぎていく情況があり、その現われがそれぞれ右翼日和見主義・極左冒険主義である。右翼日和見主義・極左冒険主義を克服するとは、認識を対象のテンポに合わせることにほかならない。

第2は毛沢東のあげた、四つの例についてである。第1例はプロレタリア階級の資本主義認識の話だが、マルクス以前が K、マルクス以後が K' である。第2例は中国人民の帝国主義認識。五四運動以前が K、以後が K' である。第3例は戦争の認識。戦争についての一般的なおしゃべりではなく、具体的な戦争・戦闘をいかに指導・指揮すれば勝つかという話である。第4例は工作任務の認識。仕事に自信がもてないというのはなぜか。どうしたら自信をもって遂行できるか、という話である。

ごらんのように四つの例は、大情況・中情況・小情況と一つ一つ具体的に話が進んでいく。小情

況に近づくとつれて、話はより具体的になり、生き生きとしてくる。しかもその論理は $K \rightarrow K'$ ,  $K' \rightarrow P'$ で一貫している。

『実践論』で毛沢東がほんとうに力をこめて語っているのは、この第3例、第4例ではないのだろうか、とわたくしは思う。この意味では『実践論』とは、「認識の話」「実践の話」なのであって、いわゆる「哲学」「弁証法的唯物論」などでは決していないのである。『実践の話』『矛盾の話』（『矛盾論』のこと）はともに延安の「抗日軍事政治大学」で話されたものだが、その教室では八路軍の衛生員や炊事員やラッパ吹きも林彪と同じく生徒であった事実を確認しておく必要があると思われる。

『実践論』の実践的意義はおそらくどんなに強調しても強調しすぎにはならないであろう。だが、われわれは『実践論』の論理にもある限界を見出さなければならないのである。その限界とは何か。毛沢東自身に語らせよう。

毛沢東は1963年5月「人的正確思想是從那里来的？」を書いた。毛沢東はここで認識過程を2段階に分ける。第1段階は、物質から精神へ・存在から思想への段階であり、『実践論』の $P \rightarrow K$ である。第2段階は、精神から物質へ・思想から存在への段階であり、『実践論』の $K \rightarrow P'$ である。さてこの $K \rightarrow P'$ について毛沢東はいう。

一般的説来、成功了的就是正確的，失敗了的就是錯誤的，特別是人類對自然界的鬭爭如此。在社会鬭爭中，代表先進階級的勢力，有時候有些失敗，并不是因為思想不正確，而是因為在鬭爭力量的對比上，先進勢力這一方，暫時還不如反動勢力那一方，所以暫時失敗了，但是以後總有一天會要成功的（乙種本，250ページ）。

『実践論』によれば、認識なり思想なり理論なりが正しいかどうかの検証は実践によってだけ可能

であった（真理的標準只能是社会的實踐。甲種本，48ページ）。ところが、ここでは実践の失敗は必ずしもその思想が正しくないことを意味しない、というのである。つまり自然に対する鬭争の場合は、実践の成功・失敗が正しい思想・誤まった思想に対応するが、階級鬭争の場合は、思想が正しくとも失敗することがあり、その原因は思想の誤りにではなく、「力関係」にある、というのである。毛沢東はこの失敗を一時的なものとして、後には必ず成功するといっているし、この引用のすぐあとでも実践以外に真理を検証する方法はない、という主張をくり返しており、この基本的な主張を改めたわけではない。

だが、われわれはこの「力関係」論の意味するものを追求しなければならない。「力関係」は何を現実的根拠としているのであるか。「力関係」の根拠の分析を含むものとしてこそ、戦略・戦術あるいは理論・政策・計画・方法が意味をもつのではないか。

『実践論』において毛沢東は自然に対する認識と社会に対する認識のちがいを全く区別していない。自然の法則も社会の法則もともに「客観世界の法則性」（客観外界的規律性、甲種本，47ページ）として、一括して把握されている。というよりはむしろ次のようにいったほうがいいかもしれない。自然科学の理論が実験によってその正しさを証明されるように、社会科学の場合も「実験」を「実践」とおきかえれば、実践によって証明されるという意味で自然科学と同じだ、というのが毛沢東の考えである、と。

しかし、自然科学は社会科学とは次の一点で決定的に異なるのである。つまり、自然科学の対象は、客体としての自然であり、対象の法則性を認識すれば、その認識をそのまま技術的に利用しう

る。これに対し社会科学の対象は、人間の主体的行動そのものであり、対象の法則性を認識したとしても、その認識を技術的・個別的に利用することはできないのである。たとえば『資本論』が明らかにした「利潤率均等化の法則」を技術的に利用することはできない。たとえば「価値法則」は個別的に利用して価格政策を作りうるのではなく、「価値法則」そのものの廃棄という形でしか「利用」しえないのである。自然科学と社会科学とのこの根本的な相違に関する認識はいわゆる宇野理論によって初めて明確な社会科学方法論（経済学方法論）として提起されたことは周知のとおりであるが、この問題に関するかぎりエンゲルス・レーニンの忠実な使徒たる毛沢東には、この視角が欠如している。理論と実践との問題は、上に述べたような社会科学の理論の特殊性をふまえたうえで、検討されなければならないが、毛沢東の『実践論』はこの視点を欠いており、これが『実践論』の限界である。だが、毛沢東にせよ、『実践論』を「活学活用」しつつある中国人民にせよ、現実には、たとえば「価値法則が部分的に利用しうるものではない」ことをかれらなりの認識方法でいわば試行錯誤的に自覚しているのであり、それが「活学活用」といわれるものである。われわれが中国革命の実践的解決・理論的未解決というのはこの間の事情を表現したものだが、ここにはなお多くの論ずべき問題があり、それらについては別稿にゆずるしかない。

ただ、ここで次の点だけはふれておきたい。それは毛沢東のコトバの使い方のことである。毛沢東のいう「社会的実践」とは何かについては、かなり混乱した理解が行なわれており、とりあえず基本的な誤解を正しくおくことが必要であると思われるから。

毛沢東は「主観・客観」「精神・物質」「思想・存在」「理論・実践」「知・行」というコトバを使う。これはすべて中国語であるか、中国語であることを忘れなければ、日本語として読んでもさしつかえない。「中国語であることを忘れなければ」というのは奇妙な言い方かもしれないが、要するに主観・精神・思想・理論・知がすべてKであるとすれば、客観・物質・存在・実践・行がすべてPであるという関係、を見失ってはならないということだ。この場合、認識・意識が思想と並んでKの系列に属することは明らかだが、理論Kはより具体化すると政策・計画・方法となるが、これもまたすべてKである。同様に実践Pは生産闘争の実践  $P_1$ ・階級闘争の実践  $P_2$ ・科学実験という実践  $P_3$ に大別することができ、毛沢東はこれを「三大革命運動」と呼んでいる。ところでこの三つの実践に対応するKが、それぞれ生産闘争の知識  $K_1$ ・階級闘争の知識  $K_2$ ・理論としての科学(実験)  $K_3$ となることはいうまでもないであろう。こうして実践と認識との関係は、より具体的にみれば  $P_1 \rightarrow K_1 \rightarrow P_1'$ ,  $P_2 \rightarrow K_2 \rightarrow P_2'$ ,  $P_3 \rightarrow K_3 \rightarrow P_3'$  となるのである。

さて、毛沢東によれば、生産闘争の知識  $K_1$ ・階級闘争の知識  $K_2$  の「結晶」こそがそれぞれ自然科学・社会科学である。したがって  $K_3$  は実質的には  $K_1$ ,  $K_2$  に分解されるわけであるが、あえて  $K_3$  を(つまり  $P_3$  を)とり出しているのは、知識から科学への発展が、科学実験という方法に依存する事実の確認こそ正しい認識を求める毛沢東にとって前提であったからであろう。

ここであと一つだけつけ加えておきたい。われわれの自然科学・社会科学という概念は、対象としての自然・社会そのものの法則性を追求することであるが、これと毛沢東の生産闘争の知識・階

級闘争の知識という概念・その結晶たる自然科学・社会科学という概念との間には、大きな差異がある。後者は生産闘争のための知識・科学、階級闘争のための知識・科学であり、強烈な実践的要請に貫かれている。この実践的性格はさしあたりは毛沢東のものであるにはちがいないが、中国の思想的伝統に深く根ざしている事実も否定できない。この意味では、伝統的知行統一論を弁証唯物論の知行統一論に換骨脱胎することが毛沢東『実践論』の課題であったといっている。(完)

(後記)

1. 拙稿の本誌前号(第11巻第12号)における新島淳良『毛沢東の哲学』からの引用について。前号58ページ右段15~18行の引用は、同書の第1刷(1966年10月)に基づいているが、第2刷(1968年10月)においてはこの箇所が次のように改められていることに気づいた。

「基本矛盾」という、『矛盾論』で一度だけ用いられている概念も用いる。

したがってわたくしの「基本矛盾が『矛盾論』には出てこない、というのも事実誤認である(例2をみよ)」という記述(58ページ、右段25~27行)は削除する必要がある。

2. 新島『毛沢東の思想』第II部「第6章ホメオスタスの思想」「第7章<易>をめぐる中国哲学界の討論について」——この2章の検討は他日を期したい。

3. 本誌前号の拙稿には、わたくしの不注意のため以下の誤植があった。読者に深くおわびしたい。

35ページ、右、12行、矛盾的な主要方面→矛盾的な非主要方面

36ページ、右、6行、支配地的矛盾→支配地的矛盾

39ページ、左、28行、和歴史上→和在歴史上

40ページ、右、1行、VI→IV

45ページ、右、第10図、封建地主階級→封建地主階級

53ページ、左、8行、XI→IX

(調査研究部)

アジア経済研究所刊行

フィリピン

-----経済と投資環境 森村勝瀨

A 5判/433頁/¥1400

外国の企業 12

シンガポールの創始産業

原田忠夫 編  
A 5判/202頁/¥600

I フィリピンの政治経済概観/自然条件/人口・社会/政治・外交/一般経済情勢/産業構造/財政・金融制度/貿易構造/外国援助/II フィリピンの投資環境/産業政策と外資政策/貿易為替政策/租税制度/企業体制/労働条件/外国資本の導入状況/わが国企業の進出状況/付録資料

I 概況 II 業種別国別出資額一覧 III 企業別国別出資額一覧  
IV 業種別企業別本表 (1)食品工業 (2)繊維工業 (3)木材・紙・家具製造業 (4)化学工業 (5)石油製品製造業 (6)ゴム製品製造業 (7)皮革工業 (8)窯業 (9)鉄鋼業 (10)非鉄金属工業 (11)金属製品製造業 (12)機械製造業 (13)電気機械器具製造業 (14)輸送用機械製造業 (15)その他の製造業 (16)非製造業

..... アジア経済出版会発売